

おおさか

KEY わーど
第62回

小説のおもしろさが絵筆を走らせ、挿絵の魅力が物語を生み出す

文豪、画伯に出会う。

“ボーイ・ミーツ・ガール”(Boy Meets Girl)という言葉は、文字通り少年が少女に出会うの意味であるとともに、小説やドラマによくある物語の類型をあらわす成句である。月並みな話という意味にも用いられるそうだ。しかし、“文豪・ミーツ・画伯”、つまり、文豪が画家と出会うと、異なる二つの芸術分野の才能が丁々発止と競い合い、月並みではない優れた作品が誕生するのである。

好例が、泉鏡花いづみきょうかと鏗木清方かぶらぎきよかただろう。鏡花は幽玄味あふれる小説を書き、清方は凜とした美人画を描いた。清方による鏡花の小説の挿絵や、それを題材とした幻想的な絵画は独自の境地を開いている。

かつての大阪は、朝日新聞や大阪毎日新聞(現:毎日新聞)の創業地であり、新聞の連載小説も盛んだった。東京美術学校(現東京藝術大学)で日本画を学んだ野田九浦のたきゅうほ(1879~1971)は、明治40(1907)年に大阪朝日新聞社に入社し、夏目漱石の『坑夫』の挿絵を描いている。

さらに大阪ゆかりの文豪なら、関東大震災で拠点を関西に移した谷崎潤一郎(1886~1965)だろう。谷崎の小説に挿絵を描いたり、本の装釘をした大阪ゆかり画家には、洋画家の小出栖重こいでなるしげ(1887~1931)や日本画家の北野恒富きたのつねとみ(1880~1947)、菅楯彦すがたてひこ(1878~1963)がいる。栖重は谷崎の『蓼喰ふ蟲』の挿絵を描き、楯彦は『月と狂言師』の装釘をした。



菅楯彦が装釘した谷崎の『月と狂言師』(個人蔵)

不思議なる因縁で谷崎と結ばれていたのが恒富である。恒富の代表作《いとさんこいさん》は以前にとりあげ、谷崎の『細雪』に影響した可能性が言われていることを紹介したが、それだけではない。

谷崎が、大阪の富商で美術のパトロンで知られ

る根津清太郎と離婚した松子と再婚し、大阪を舞台とした小説を書いたことは有名だが、それをさかのぼって清太郎と松子の結婚式の豪華な大振り袖に絵を描いたのは恒富であった。また、恒富の代表作の一つで、若き日の淀君を描いた大正10(1921)年の再興第八回院展《茶々殿》(大阪府立中之島図書館所蔵)は松子がモデルとされ、昭和7年刊行の谷崎の『盲目物語』(中央公論社)の口絵に用いられている。

他にも『蘆刈』(創元社、昭和8年)の挿絵や、『乱菊物語』(朝日新聞連載、昭和5年)の挿絵も恒富が描いた。『乱菊物語』は恒富没後、息子の北野悦子きたのえつこの装幀で単行本として刊行される。



北野恒富が描いた『乱菊物語』の挿絵の原画(個人蔵)

恒富のお孫さんの北野悦子さんにうかがった話では、谷崎は、恒富を主人公にして、故郷の金沢を出て大阪で画家として名を成したことや、宗右衛門町などのお茶屋遊びを小説に書きたかったらしい。しかし、恒富とあまりにも仲よくなったため、書きづらくて止めたという。

この秋、大阪商業大学商業史博物館で「北野恒富と中河内-知られざる大阪画壇の発信源-」(10月20日~11月28日、休館:日曜祝日)が開催され、『乱菊物語』の新聞連載時の原画も初公開される。小規模だが、大阪では没後初の回顧展となり、ある意味“大阪人・ミーツ・恒富”となる訳だが、決して“月並みな話”ではないので、関心のある方はぜひご覧ください。

ところで恒富の創作の本拠地は、道頓堀川に面した宗右衛門町など、南地の花街であった。嗚呼、《茶々殿》といい、今回も大坂の陣400年、道頓堀開削400年にちなむ話題になってしまった…。

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長/大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人」「北野恒富展」「没後80年記念 佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大坂イメーজ増殖するマンモス/モダン都市の幻像一」(創元社)など。